

獄中書簡としてのⅡテモテ書

辻 学

Ⅰ. 問題の所在——牧会書簡全体におけるⅡテモテ書の機能

Ⅰ・Ⅱテモテ書とテトス書の3書簡をまとめて「牧会書簡」(Pastoralbriefe)と名づけたのは、18世紀の釈義家P. Antonであると言われている¹⁾。この名称は広く受け入れられるに至り、今日の新約聖書学では、新約概論でも注解でもこの3通をひとまとめに扱うのが一般的となっている。

同様に広く認められているのは、この牧会書簡は、パウロの名前を借りて書かれた偽書であり、パウロ以後の時代状況から生まれてきたということ、そして、3通は同一の著者によって書かれたということである。今日でもなお、牧会書簡をパウロの真筆に帰そうとする動きは止むことがないが、説得的な根拠づけは見られない。詳細な議論は本稿では割愛するが²⁾、牧会書簡の著者問題については、これを偽書とする通説に従うのがやはり正しく、本稿でもその前提で以下の議論を進めて行くことにしたい。

牧会書簡を構成する3書簡は、偽書であるというだけでなく、同一の著者による作品であるということもまた通説となっている。だが、それでは何故この3通から成る構成にしているのかという問いには、我々の知る限り、まだ十分な答えが与えられていないようである。この問いは、Ⅱテモテ書を見る時にとりわけ強く浮かび上がってくる。というのも、3通のうちでⅡテモテ書だけが特異な存在だからである。Ⅱテモテ書の特異性は、次のような点にある。

- (1) 牧会書簡の中で、Ⅱテモテ書だけが異なる内容を持っている。「牧会書簡」

という名称は、教会における牧会の務めについて指示をしている書簡という意味であり、Ⅰテモテ書とテトス書は確かにこの名称にふさわしい内容となっている。すなわち、監督・執事³および長老職による教会内秩序の確立ということが、この2通の主題なのだが、他方、Ⅱテモテ書にはそのような主題は見られず、その主たる内容は、パウロの遺訓である。つまり、「牧会」書簡という名称にⅡテモテ書はふさわしくないのである。確かに、異なる教えの排除という主題は牧会書簡全体に共通している（Ⅰテモテ1:3-11; 4:1-10; Ⅱテモテ2:14-3:9; テトス1:10-16）。しかし、なぜこのような内容のⅡテモテ書を他の2通と組み合わせる必要があったのだろうか。

- (2) Ⅱテモテ書には、Ⅰテモテ書への言及が見られない。このことは、3通が互いに関連づけられて一つの全体を作り上げているとしたら、奇妙な感じがする⁴。著者は、Ⅰテモテ書の存在を踏まえて書いているにも拘らず、そのことには全く触れていない。つまり、フィクションの次元では、Ⅰテモテ書を踏まえてⅡテモテ書が書かれたのではないことになっているのである。両者の間を遠ざけるようなこの手法は何を意図しているのだろうか。

牧会書簡が、全体で一つの作品として構想されているのだとしたら、このような性格のⅡテモテ書がその中で担っている役割はいったい何なのか。そして何故、3通で一体というような創作を著者はしたのだろうか⁵。

著者が、一つの文書で全てを言い表そうとしなかったのはおそらく、それぞれ状況の異なる複数の文書を用いること自体に意味があったからであろう。だとすれば、三つの手紙が前提している（フィクションの次元での）歴史的状況および手紙の指示内容を比較検討することによって、その目的が明らかになるに違いない。とりわけ、3通の中で特異な性格を持っているⅡテモテ書の内容が他の2通と、さらには真正パウロ書簡とどう関連づけられているのかを明らかにすることができれば、牧会書簡全体の意図も見えてくるはずである。

Ⅱ．牧会書簡の前提している歴史的状況

牧会書簡を構成する3通はそれぞれ、どのような歴史的状況を描き出しているフィクションなのだろうか。そして、各書簡の描く状況は相互に関連づけられたものなのだろうか。まずは、似通った内容を持っているⅠテモテ書とテトス書を検討し、それからⅡテモテ書を見ることにしよう。

1. Ⅰテモテ書

Ⅰテモテ1:3によればパウロはマケドニア州へと出発する際にテモテに対し、エフェソに残るよう命じている。パウロがテモテと別れた場所は、エフェソと考えて間違いないであろう。したがってこの手紙は、(おそらく今もマケドニアにいる)パウロから、エフェソにいるテモテへ宛てられた書簡という設定になっている。

エフェソに残ったテモテがパウロから託された務めは、誤った教えが流布しないよう、教会を守ることであった(1:3-4)。このことは、手紙の結び(6:20-21)でも強調されており、Ⅰテモテ書全体を枠づける中心主題であることがわかる。

書簡の中でパウロは、監督・執事などの資格について細かいことを指示しているのだが、他方パウロ自身は、自分が間もなくテモテのところに行けると考えているようである(3:14; 4:13)。短期間の不在にしては、パウロの指示はあまりに細かく、不自然な感じすらする。とすると、なぜこのような状況設定が必要だったのかという点が問題となつてこよう。

2. テトス書

テトス書のパウロは、クレタで活動していたのだが(1:5)、そこから移動して、今はニコポリスにいる(3:12)。この書簡は、ニコポリスからクレタへ宛てられたという設定である。クレタに残ったテトスの務めは、「残っている仕事を整理し、町ごとに長老たちを立て」ることだとされている(1:5)。それまでの

活動場所から離れたパウロが、残された弟子に対して、自分の仕事の継続を命じるという状況設定は、Ⅰテモテ書とテトス書に共通している。

パウロと後継者（テモテ・テトス）の再会が早期に予定されているという点でも、この2通は並行関係にある。もっともテトス書の場合は、パウロが戻ってくるのではなく、テトスの側がパウロに会いに行くことになっている。アルテマスかティキコが、パウロのいるニコポリスから、クレタのテトスのもとに派遣される予定になっており、二人が到着したら、入れ替わりにテトスがニコポリスへ来るように、というのである（3:12）。

3. Ⅱテモテ書

Ⅱテモテ書が描いている状況は、他の2通とは全く異なっており、共通点や連続性を示すものがほとんどない。

パウロは囚人（1:8）となって現在ローマ⁶にいる（1:17）。1:4で言及されているテモテの「涙」とは、節の後半にある、「再会の喜び」と対比されていることからして、パウロとの別離の際に流された涙を暗示していよう。この「涙」は、再会を前提しているⅠテモテ書の場合とは異なり、二人の別離が最終的なものであることをも示している。いずれにせよ、テモテとパウロは（Ⅰテモテ書の時とは全く別の状況で）現在離れている。テモテがいる場所は、1:18および4:19（「プリスカとアキラ⁷に、そしてオネシフォロ [1:16-18参照] の家の人々に……よろしく」）から考えれば、エフェソであろう。つまりこの書簡は、ローマからエフェソに宛てられたという設定である。

パウロは、テモテと別れた後に、トロアス（4:13）、コリント（4:20）、ミレトス（4:20）などを通してローマに来たとされている。これが、伝道旅行の旅程なのか、エルサレムで逮捕された後の護送を指しているのかははっきりしない。旅程も、あまり厳密には考えられていないようである。いずれにせよこの内容は、使徒言行録の描写している内容とは相容れない。そもそも使徒20:4によればテモテは、パウロのエルサレム行きに同行しており、エフェソにおける長老たちとの別離（使徒20:17-38）の後もパウロと一緒にだったと考えられるからで

ある⁹。

1:15には、「アジア州にいた人々」(οἱ ἐν τῇ Ἀσίᾳ)⁹が皆パウロから離れてしまった、と記されている。これは、パウロが以前に小アジアで捕らえられた際の出来事(Ⅱコリント1:8-9参照)を指し示していると考えられる。そうだとすれば、現在のローマにおける投獄(軟禁?)は、何度目かの出来事であるということになろう(ローマ16:7参照)。

Ⅱテモテ書には、Ⅰテモテ書で言及されているのと同じ人物が現れる。2:17にはヒメナイとフィルト、4:14にはアレクサンドロという人名が出て来るが、このうちヒメナイとアレクサンドロはⅠテモテ1:20でも言及されている。ところが、Ⅰテモテ書では両者がペアになっているのに対し(「その中にはヒメナイとアレクサンドロがいます」)、Ⅱテモテ書では両者は別々に登場する¹⁰。両書簡が短い時間間隔で連続しているという設定であれば、このような言及の仕方は考えられない。これはむしろ、Ⅰテモテ書とⅡテモテ書が、同じエフェソの状況を述べていながら、時間的に連続していないことを示す文学的技法であると考えることができよう。

同じことは、テトスへの言及についても言える。4:10によれば、テトスは現在ダルマティアに行っているという。他方、テトス書執筆の時点では、テトスはクレタにいたことになっており、その後、アルテマスかティキコと入れ替わりに、ニコポリスのパウロのもとへ来るよう求められているのだが、このテトス書の状況との関連は、Ⅱテモテ書では何ら意識されていない。つまり、Ⅱテモテ書は、テトス書の状況とも時間的に連続していないということが、このテトスの扱いによって暗示されているのである。

以上の比較を通して明らかになるのは、三つの文書が、相互につながりのない状況を前提としているということである。Ⅰテモテ書とテトス書は、内容的によく似た状況を描いているが、しかし両者は空間的に離れている。そしてⅡテモテ書の描く状況は、Ⅰテモテ書ともテトス書とも時間的に断絶しており、両書簡の存在を踏まえて書いたという設定に全くなっていない。

つまり、この3書簡は、特定の状況で特定の問題をめぐって一気に、ひとまとまりのものとしてパウロが書いたのではなく、それぞれが、パウロの生涯の中で別々に書かれ、後にまとめられたに過ぎないという体裁を取っているのである。

牧会書簡の著者がこのような体裁を取ったのはおそらく、3通に共通する主題、すなわち異なる教えをめぐる問題が、パウロの生涯における特定の局面に限られる問題ではなく、パウロを常に悩ませていた重要な問題であったという印象を読者に与えるためであったろう。著者はこの3通を、パウロの生涯の中に散在させることによって、異なる教えへの対抗という課題に、時間的・空間的広がりを与えようとしたのである。この課題は、パウロの行くところに広く存在し、生涯の最後までパウロを悩ませていた。その問題に今、牧会書簡の読者自身も直面しているのだというわけである。

Ⅲ. 「獄中書簡」としてのⅡテモテ書

牧会書簡を構成する3書簡が、それぞれ別々の状況を前提としていることの意味は明らかになったが、それでは、Ⅱテモテ書が、Ⅰテモテ書およびテトス書とは異なり、「獄中書簡」の体裁を取っている意味は何なのだろうか。

1. 他の「獄中書簡」への依存関係

パウロが獄中から手紙を書くという設定は、すでにパウロ書簡に見られるものであり、牧会書簡の著者が、既に存在した「獄中書簡」のいずれかを手本にしてⅡテモテ書を書いたことはほぼ間違いない¹¹⁾。

Ⅱテモテ書の手本となったのは、フィリピ書であろう。また、牧会書簡の著者は、フィリピ書に加えて、フィレモン書（およびコロサイ書？）をも知っていた可能性がある。以下の比較は、そのことを裏付ける。

(1) フィリピ書の知識

Ⅱテモテ 4:6 は、フィリピ 1:23 および 2:17 に、そしてⅡテモテ 4:7-8 は、

フィリピ2:16および3:12, 14に依存していると考えられる。それぞれ、対応する語句があり、Ⅱテモテ書の用例は、フィリピ書を意識したものだとしか考えられないからである。

(テキストの比較)

Ⅱテモテ4:6-8

6 というのも、私自身は既に、〔自分の血を〕注がせられており (ἤδη σπένδομαι), 私の旅立ちの時 (ὁ καιρὸς τῆς ἀναλύσεώς μου) が近づいている。7私は良き戦いをなし、走るべき行程を成し遂げ (τὸν δρόμον τετέλεκα), 信仰を保ってきた。8あとは、義の栄冠(フィリピ1:11; Iコリント9:25参照)が私に用意されている。正しい審判者としての主が、かの日に (ἐν ἐκείνῃ τῇ ἡμέρᾳ) それをわたしに授けてくださるであろう。私だけでなく、主の出現を待ち焦がれる者全てに授けて下さるのである。

フィリピ1:23

23 この二つのことに板挟みとなっている。一方では、〔この世を〕旅立ち (εἰς τὸ ἀναλῦσαι), キリストと共にありたいという願望を持っており、この方がはるかに良い。

フィリピ2:16-17

16 [...]無駄に走ったのではなく (οὐκ εἰς κενὸν ἔδραμον), 無駄に労したのもなかったということが、キリストの日に (εἰς ἡμέραν Χριστοῦ) 私の誇りとなろう。17 だがもし、君たちの信仰のいけにえと儀式の上に、〔私の血を〕注がせられることになったとしても (εἰ καὶ σπένδομαι), 私は喜び、君たち全てと共に喜ぶ。

フィリピ3:12, 14

12 私が既に得たとか、既に成し遂げたというわけではない (οὐκ ὅτι [...] ἤδη τετελείωμαι)。何とかして捕えることができないかと追い求めているのである。自分もまたキリスト [・イエス] によって捕らえられているのだから。[……] 14キリスト・イエスにおける上へ召しという賞のため、目標を追い

求めている (κατὰ σκοπόν)。

Ⅱテモテ4:6の「既に注がせられている」(ἤδη σπένδομαι) は明らかに、フィリピ2:17の「注がせられることになったとしても」(εἰ καὶ σπένδομαι) を踏まえたものである(新約ではこの2箇所にはσπένδομαιの用例はない)。自分の死を「旅立ちの時」(ὁ καιρὸς τῆς ἀναλύσεώς μου) と表現するのは、フィリピ1:23の「旅立つこと」(τὸ ἀναλῦσαι) と一致するし、4:7の「走るべき行程を成し遂げた」(τὸν δρόμον τετέλεκα) という言い回しも、フィリピ2:16の「無駄に走ったのではない」(οὐκ εἰς κενὸν ἔδραμον) および3:12の「既に成し遂げたというのではない」(οὐκ... ἤδη τετελείωμαι) と極めて近い。「義の栄冠」(フィリピ1:11; Iコリント9:25参照) を受ける「かの日」(Ⅱテモテ4:8) というのも、フィリピ1:10および2:16の「キリストの日」を踏まえて初めて明瞭になる表現である。

これだけの対応関係がある以上、Ⅱテモテ書を書く際に著者がフィリピ書を手本にしたと見てはば間違いないであろう。

(1) フィレモン書・コロサイ書との関係

Ⅱテモテ書には、他の新約文書ではフィレモン書およびコロサイ書にのみ言及のある人名が見られる。

① デマス (4:10) フィレモン24およびコロサイ4:14によれば、デマスはまだパウロのもとにいる。それに対してⅡテモテ4:10では、パウロを見捨ててテサロニケへ行ってしまったという。

② ルカ (4:11) フィレモン24によればルカは、マルコ、アリストルコ、デマスと一緒にいる。コロサイ4:14でも、デマスと共にパウロのもとにいる。しかしⅡテモテ4:11になるとルカは、たった一人でパウロのもとに残っている。

③ マルコ (4:11) ルカのところで述べたように、フィレモン24によればマルコは、アリストルコ、デマス、ルカと一緒にパウロのもとにいるという。コ

ロサイ 4:10は、今はパウロのもとにいるマルコが、コロサイへと派遣される予定になっているとしている。これに対して、Ⅱテモテ書のマルコは、今はパウロを離れて、テモテと共にいることになっており、テモテと共に（エフェソから？）パウロのところに来るよう求められている。

④ ティキコ（4:12） ティキコは、使徒20:4によれば、テモテらと共にパウロのエルサレム行きに同行した人物である。真正パウロ書簡にはこのティキコは登場せず、コロサイ4:7において、パウロがコロサイへオネシモと共に派遣したという設定で現れる（エフェソ6:21-22はコロサイ書に依存したものであろう）。この「派遣」というモチーフがティキコを特徴づけており、テトス3:12では、ニコポリスにいるパウロが、クレタのテトスへ派遣しようとしている。そして、Ⅱテモテ4:12ではローマからエフェソに遣わされている。

このように、パウロのもとにいた人々の名前を見ていくと、牧会書簡の著者がフィレモン書とコロサイ書（真正パウロ書簡に現れない人物であるティキコへの言及は、コロサイ書の知識を窺わせる）を踏まえている可能性が十分に考えられる。フィリピ書だけでなく、フィレモン書やコロサイ書といった獄中書簡をも牧会書簡の著者は知っており、そのスタイルを真似てⅡテモテ書を作り上げたのであろう¹²。

2. 他の「獄中書簡」との相違

では、フィリピ書やフィレモン書、さらにコロサイ書といった獄中書簡を真似て、新たにもう1通の獄中書簡を作った著者の意図はどこにあったのだろうか。

パウロが獄中からこの手紙を送っているという状況設定は、手紙の最初と最後、すなわち1:8, 12, 15-18と4:6-18でなされている。このうち、他の獄中書簡への依存関係をはっきりと示しているのは4:6-18だが（上述参照）、この部分を見ていくと、Ⅱテモテ書が描く獄中のパウロは、他の獄中書簡よりも時間的に後の状況にあり、死が差し迫っている様子を想像させる。これが著者による仕掛けであることは、以下の観察から明らかである。

4:6-8は、上述のようにフィリピ書の表現を踏まえて書かれているが、その

際著者は、フィリピ書よりもさらに進んだ（＝死が近づいた）段階にパウロが置かれていることを示している。フィリピ2:17では「たとえ〔自分の血を〕注がせられることになったとしても」（εἰ καὶ σπένδομαι）と仮定の形で述べられていることが、Ⅱテモテ4:6では「すでに注がせられている」（ἤδη σπένδομαι）という現実の事柄になっているし、フィリピ1:23の「〔この世を〕旅立ちたい」という希望の実現が、Ⅱテモテ4:7ではいよいよ近づいたように書かれている。同様に、Ⅱテモテ4:7の「成し遂げた」（τετέλεικα）という言い方は、「既に成し遂げたというのではない」（οὐκ ὄτι... ἤδη τετελείωμαι）というフィリピ3:12からの進展を示す表現である¹³。さらに、フィリピ1:25-26; 2:24; フィレモン22ではまだ、自分が獄から解放されて、手紙の受信人のもとへ行けるとパウロは期待しているのに対し、Ⅱテモテ4:6ではそのような期待は表明されず、自分の死が近いことを述べているという点も、Ⅱテモテ書の方が時間的により後の段階であることを示唆するものである。

同じ示唆は、4:9-15からも読み取れる。デマス、マルコ、そしてそもそもテモテもそうだが、フィレモン書・コロサイ書ではパウロと共にいる人物が、Ⅱテモテ書の段階では、ルカを除いて皆、パウロのもとを離れてしまっているのである¹⁴。親しい人が皆離れて行き、一人残されたパウロの姿は、死が近いという印象を一層強く印象づける。

他の獄中書簡においては書簡の共同発信人となっているテモテが、Ⅱテモテ書ではパウロと離れているという設定は（別離の場所はおそらくエフェソが考えられている。上述参照）、フィリピ書・フィレモン書がエフェソから書かれたものだ（牧会書簡の著者が考えていたと）すれば納得がいく¹⁵。つまり、テモテはエフェソに残ったが、パウロは今やローマに来ているのである。

16-18節の叙述も、パウロの死が差し迫っているという我々の想定と矛盾しない。「最初の弁明」（16節）とは、この出来事をわざわざテモテに報告していることからして、ローマで起こった事柄を指していると思われる。具体的に同定できる特定の史実が考えられているわけではなく¹⁶、何らかの弁明の機会がローマであったということを示唆しているに過ぎない。強調点はむしろ、パウロの

最期が次第に迫っている様子と、助けてくれる人が周囲に最早いないパウロに対する神の保護にある。「獅子の口から助け出された¹⁷⁾」(17節)というのも、「最初の弁明」における危険が回避されたことを指しているに違いないが、獄からの解放(とそれに続く再度の投獄=現在)といった具体的な事柄を意味しているとは考えられない¹⁸⁾。17節は、続く18節の例証として機能しているのである。その18節が語っているのは、この先どのような「悪い業」に遭っても神が(17節の場合と)同じように助け出し(17節でも18節でも同じ動詞「助け出す」[ρύομαι]が用いられている)、御国へと入れて救ってくれるというパウロの確信である。だがそれは同時に、自分の死をパウロが予期していることを示すものでもある。

このようにⅡテモテ書は、パウロがローマの獄中で、間近な死を予期しつつテモテ宛てに書いた遺訓的書簡であり、他のどの書簡よりも時間的に後に書かれたという体裁を取った文書なのである。そのような差し迫った状態でもなおパウロが何よりも強調したかったのは、「私の福音」(2:9)から逸脱する者たちに対する警戒、すなわち牧会書簡全体に共通するテーマだったということを著者は、獄中書簡としてのⅡテモテ書によって読者に印象づけようとしているのである。

IV. 結 論

最後に、以上の考察をまとめておこう。

1. 牧会書簡は、時間的・空間的に連続しない別々の手紙を寄せ集めたものという体裁を取っている。これによって、3書簡に共通する、異なる教えの排除という問題が、地域的なものでも一時的なものでもなく、パウロの伝道活動全体に関わる重要な関心事であったという印象が生じる仕掛けになっている。

2. Ⅱテモテ書は、フィリピ書・フィレモン書(およびコロサイ書?)を手本として書かれた「獄中書簡」であるが、フィリピ書・フィレモン書がエフェソから送られたものである(と著者は考えている)のに対して、Ⅱテモテ書はローマからの、パウロの人生における最後の段階で書かれた体裁になっている。パウロの遺訓的手紙という設定によって、Ⅱテモテ書(そして牧会書簡全体)の主張が

重要度を増すという効果を著者は狙っているのである。

[注]

- (1) P. Anton, *Exegetische Abhandlung der Paulinischen Pastoral-Briefe*, Halle I 1753, II 1755 (筆者未見)。U. Schnelle, *Einleitung in das Neue Testament* (UTB 1830), Göttingen 1999, 341 参照。
- (2) 牧会書簡の著者問題については、拙稿「牧会書簡——真筆性擁護の動きをめぐって」, 『商学論究』(関西学院大学商学研究会) 50 卷 4 号 (2003 年 3 月) 135-152 頁を参照されたい。
- (3) διάκονος という語に新共同訳が充てている「奉仕者」という訳は不適切である (Ⅰテモテ 3:8 ほか)。これは明らかに、教会の職務を指しており、「執事」と訳すのが正しい。「奉仕者」では曖昧すぎる。この問題については、荒井献『新約聖書の女性観』岩波書店, 1988 年, 204 - 205 頁を参照。
- (4) Ⅱテサロニケ 2:2 は明らかに、Ⅰテサロニケ書の存在を (批判的に!) 示唆したものである。Ⅱペトロ 3:1 がⅠペトロ書を指しているかどうかについては議論があるが、やはりこれはⅠペトロ書を前提とした表現だと考えるのが素直であろう。
- (5) もちろん、牧会書簡がパウロの真筆だという前提に立てば、この問いは不要となるが、上述したように、ここではその立場は採らない。
- (6) この箇所の ῥώμη を「ローマ」ではなく「気力」と訳すべきだという G. ネランの主張 (『牧会書簡—パウロの初期の手紙』, 『聖書学論集』33 号 [2001 年] 51 - 77 頁, うち 58 頁) は受け入れられない。前掲拙稿 (注 2) 146 - 148 頁を参照。
- (7) プリスカとアキラは、ローマ→コリント→エフェソと移動している (使徒 18:1 - 3, 24 - 26; Ⅰコリント 16:19 参照)。ここでは、二人の所在地はローマでもコリントでもない (Ⅱテモテ 4:20 参照) ゆえ、エフェソと考えられる。
- (8) それとも、牧会書簡の著者は、エルサレムへ向う途上にエフェソでテモテもパウロから離れた (とすれば、Ⅱテモテ 1:4 の「涙」はその際に流された?) と考えているのであろうか。確かに、使徒 20:4 は、エルサレムまでパウロとテモテが一緒だったとは記していない (20:4 以降、使徒言行録はテモテに言及しない)。しかしこの蓋然性は高くない。もしテモテがエルサレムに同行していなかったのなら、ローマでの出来事と同様に、別離後の事柄であるエルサレムでの事件についても何か言及される方が自然だからである。
- (9) これを「アジア州にいた人々」ではなく、「アジア州出身の人々」と取り、その人々がローマに来ていたが、パウロを離れて行ったという意味に解する注解者もある (C. Spicq, *Les Epîtres Pastorales* [EtB], t.2, Paris 1969, 732; P. Dornier, *Les*

Epîtres Pastorales [SBi], Paris 1969, 198)。しかし、もし「アジア州出身の人々」であれば、οἱ ἐκ τῆς Ἀσίας となる方が自然である。Dornierはこれをセム語的用法として説明するが、説得力を欠く（Dornierが例として挙げているローマ5:15は妥当かどうか疑わしいし、BDR § 437₂が挙げているのは、ἐν の代りに ἐκ が使われている例のみ）。文脈から考えても、1:18のオネシフォロス（エフェソでパウロに良く仕えた）との対比になっていること、そして、15節の出来事を（パウロと離れている）テモテが既知っていること（οἶδας τοῦτο）からして、ここでは小アジア（おそらくエフェソ）での出来事が遡及的に指示されていると考える方がよい（L. Oberlinner, *Die Pastoralbriefe, zweite Folge: Kommentar zum Zweiten Timotheusbrief* (HThK IX/2/2), Freiburg u.a. 1995, 58に賛成）。

- (10) Iテモテ1:20とIIテモテ4:14の「アレクサンドロ」を別人物と考える解釈者もいるが（例、H. Merkel, *Die Pastoralbriefe* [NTD 9/1], Göttingen 1991, 86）、Iテモテ書でもIIテモテ書でも、パウロに逆らう人物として挙げられていることからして、両者は同一人物であると見る方がよい（Oberlinner[注9], 176に賛成）。使徒19:33-34に出てくるアレクサンドロ（銀細工人デメトリウスの起こした反乱の中で弁明をしようとしたユダヤ人）との同一視については議論が分かれている（Oberlinner[注9], 175参照）。
- (11) 牧会書簡の著者は、複数のパウロ書簡を知っている。I・IIテモテ書には、ローマ書とIコリント書に依存した部分が多く見られる（例、Iテモテ1:8 = ローマ7:12, 16。Iテモテ1:20 = Iコリント5:5。IIテモテ1:8 = ローマ1:16。IIテモテ2:11-13 = ローマ6:3-4, 8; 3:3など。Schnelle[注1], 353; A. Lindemann, *Paulus im ältesten Christentum* [BHTh 58], Tübingen 1979, 136-147参照）。また、テトスを受取人に選んだのは、IIコリント書を知っていたためだと考えられよう（P. Trummer, *Corpus Paulinum - Corpus Pastorale*, in: K. Kertelge [Hg.], *Paulus in den neutestamentlichen Spätschriften* [QD 89], Freiburg 1981, 122-145: 130）。さらに、H. von Lips, *Von den "Pastoralbriefen" zum "Corpus Pastorale"*, in: U. Schnelle (Hg.), *Reformation und Neuzeit. 300 Jahre Theologie in Halle*, Berlin 1994, 49-71: 67は、ガラテヤ書の知識もIテモテ書には見られると言う。
- (12) いわゆる「獄中書簡」にはさらにエフェソ書も含まれるが、IIテモテ書がエフェソ書を踏まえているかどうかは明らかでない。
- (13) P. N. Harrison, *Paulines and Pastorals*, London 1964, 92: 「フィリビ書では将来の可能性に過ぎない事柄が [……], IIテモテ書ではすでに起こっているか、あるいは進行中の事柄になっている」。Oberlinner[注9], 160も同様。
- (14) テサロニケ（デマス）、ガラテヤ（クレスケンス）、ダルマティア（=イリリコン。ローマ5:19参照）といった地名は、パウロの宣教活動の地域的広がりを暗示しているものと思われる。

- (15) フィリピ書（特に、投獄状況を反映する1:1-3:1a）およびフィレモン書の執筆地としては、エフェソを考える解釈者が多い（フィリピ書については、佐竹明『ピリピ人への手紙』〔現代新約注解全書〕新教出版社、1969年、8頁、山内真『ピリピ人への手紙』日本基督教団出版局、1987年、19頁、N. Walter, *Der Brief an die Philipper*, in: ders. u.a., *Die Briefe an die Philipper, Thessalonicher und an Philemon* [NTD 8/2], Göttingen 1998, 9-101: 15-17 他。フィレモン書についてはP. Lampe, *Der Brief an Philemon*, in: Walter u.a., a.a.O., 203-232: 205; P. Stuhlmacher, *Der Brief an Philemon* [EKK XVIII], Zürich/Neukirchen-Vluyn 1989, 19-20 など参照）。それに対して Schnelle [注1], 146-148.159 は、両書簡の執筆地をローマとする説を再び支持している。
- (16) 例えば、使徒28章が指し示されており、（そこから解放された後）いま現在パウロは2度目のローマ投獄を経験している、という解釈があるが、これに対する批判は、N. Brox, *Die Pastoralbriefe* (RNT), Regensburg 1989, 28-31.275 を参照。
- (17) この表現は、I マカベア2:60 および詩編21:22LXXの言葉づかいに部分的ながら一致する。とはいえこれを、土屋博『牧会書簡』日本基督教団出版局、1990年、129頁のように、「詩二二・二一[マ]からの引用」と断定するのは行き過ぎであろう。
- (18) 手紙の状況設定として、そのような以前の事柄をここでテモテに報告する必要があったというのは不自然であろう。J. N. D. Kelly, *The Pastoral Epistles* (BNTC), London 1963, 271 や W. D. Mounce, *Pastoral Epistles* (WBC 46), Nashville, TN 2000, 595 といった、牧会書簡の真筆性を主張する注解者たちも、同じ理由から、ここではローマにおける一連の出来事（予審）が語られていると考える。

（本稿は、2002年9月12-13日に上智大学で行われた、日本新約学会第42回大会における研究発表に基づいている。）